

日英教育学会 公開研究会

2026年3月7日（土）

14:00~15:30

オンライン

近代英國哲学とキリスト教神学 —スコットランド啓蒙の時代—

講師：矢嶋直規氏
(国際基督教大学教授)

司会：佐藤千津（国際基督教大学）

〈事前登録〉

一般の方は以下の「事前登録」ボタンまたはQRコードから3月4日（水）までにご登録ください。ZoomのIDをメールでお送りいたします。参加費は無料です。会員の方の事前登録は必要ありません。

<https://forms.gle/WnnTfh6nQEpAVvGW8>

事前登録

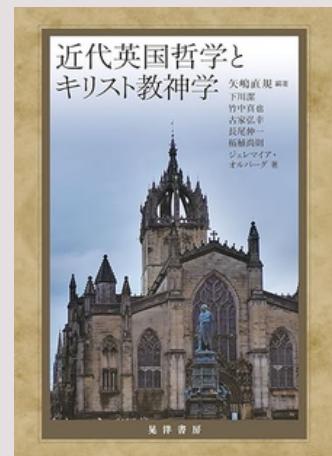


趣旨

宗教は、啓蒙の知的潮流を形成する上で中心的なテーマの一つであった。啓蒙期の主要な哲学者は皆、肯定的であれ批判的であれ、何らかの仕方で宗教の問題を取り組んでいる。それ故、それぞれの哲学体系が宗教をいかに位置づけるかは、その哲学を特徴づける決定的要素である。啓蒙期の哲学において宗教がどのように扱われているかを理解することは、啓蒙という思想運動全体を理解するうえで不可欠であるといえる。17世紀のイングランド啓蒙とりわけジョン・ロックの哲学やニュートンの自然学を受けて、社会科学の発展に大きく寄与した18世紀のスコットランド啓蒙の中核的人物であるディヴィッド・ヒューム(1711-1776)は、キリスト教に対する強硬な批判者と見なされてきた。主著の『人間本性論』の序論において、ヒュームは自らの「人間本性の学」が、「自然宗教〔自然神学〕」に、予期しえなかつたような変容と改善をもたらすことが期待される」と述べている。しかしそれがいかなる仕方で、そしてどのような帰結を伴うのかは必ずしも明確ではなく、宗教に関する彼の哲学的立場の正確な立場は、なお解釈の余地を残している。ヒュームは真意を偽った無神論者であったと論じる研究者もいれば、理神論を支持していたと主張する者もいる。いずれにせよ、ヒュームの宗教観が多面的であるという点については、研究者の一致が見られる。本報告では、ヒュームの宗教哲学と、より広い意味での彼の形而上学体系—物体の存在とその信念の理論—との連関を探ることで、この問題に新たな視点を提示することを目的とする。とりわけヒュームの形而上学をロックとの比較において明らかにすることで、スコットランド啓蒙が哲学の変革を通してどのような世界観を作り出そうとし、どのような社会の発展を目指す運動であったのかを理解する手掛かりを提示したい。

関連書籍

矢嶋直規編著
『近代英国哲学とキリスト教神学』
(晃洋書房 2024年)



企画：沖清豪（早稲田大学） 片山勝茂（東京大学） 佐藤千津（国際基督教大学）

日英教育学会
<https://juef.org/>